

佐佐木信綱の長崎詠

久保 美洋子

年輩のお人であれば、子供の頃に歌った「夏は来ぬ」「水師營の会見」を憶えていらつしやるであろう。この唱歌の作詩者が佐佐木信綱である。また、

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

の一首は、歌曲として今も歌い継がれ、信綱唱歌の代表作とされている。佐佐木信綱は明治五年安濃津県(現三重県)の生れで、東京帝大卒。万葉集をはじめとする古典和歌と和歌史の研究に歴大な仕事を残した国文学者。また、父弘綱の竹柏会を継ぎ、歌誌「心の花」を創刊して多くの歌人を育て、自らも優れた短歌作品を多く残した歌人であった。



佐佐木信綱が来崎した頃の長崎駅

この夏、NHK連続テレビ小説「花子とアン」が大層話題となっていた。その主人公のモデル村岡花子は『赤毛のアン』『若草物語』など外国文学を紹介した翻訳家として知られるが、若い頃は佐佐木信綱の弟子であった。短歌の実作指導だけでなく、日本古典文学の講義も受けており、信綱から勧められて読んだ森鷗外の『即興詩人』(アンデルセン)の訳文の美しさに感じ入ったのが、翻訳に心を寄せた最初だったという。

歌人としての道を諦めた花子は、児童文学者、翻訳家として活躍した。当時の信綱門下の女性歌人には、花子の友である片山廣子、九条武子、柳原白蓮など錚々たる顔ぶれが揃っていた。その中で、花子の友としてドラマに登場した白蓮の第一歌集『踏繪』復刻版は良く売れて、この七月に第三刷が発行された。ドラマの効果は大きいものである。筆者も購入した一人だ。

白蓮の『踏繪』は、大正四年竹柏会より出版。竹久夢二の装丁と、佐佐木信綱の「白蓮は藤原氏の女なり」で始まる序章には往時の雰囲気の色濃く漂う。この序章を読みながら、信綱が長崎に度々訪れたということを感じ出した。当地での斎藤茂吉と吉井勇の歌は割合に良く知られているけれど、信綱の長崎詠は、あまり知られてはいない。ドラマの波及効果の一つのような気がするが、ここに信綱の長崎詠を紹介してみる。

阿蘭陀の入舟見えて長崎の浦のゆふ波春しづかなり

この一首は信綱の第一歌集『思草』所収で、オランダ船が入港していた頃の長崎を想像した歌であろう。次の歌からが、実際に長崎で詠まれた作品である。

長崎に着く。明治三十七年二月初なり

いく月を旅に酔ひたる夢きえて港の街は人あわただし

第二歌集『遊清吟藻』末尾の歌で清国(現中国)よりの帰路、長崎に着いたのであった。数ヶ月に及ぶ南清の旅を了えての帰国第一声は港町長崎の慌しさ。第三歌集『新月』にも、この折の思い出のような一首が混じっている。

長崎の船出の朝を小舟漕ぎ一言いひに来にしおもかけ
第七歌集『鶯』には、昭和四年来崎(五十七歳)時の作品が収録されている。
フルカデン色絵の皿に盛りてきぬ迎陽亭の秋の夜の卓

風信

○本日は十二月十日、今年も後二十日となりました。

本年も色々の事がありました。十月・十一月の長崎がんばらんば国体・大会の全てが無事に終了、国体は天皇盃も載られたとの由、今年一番のうれしい事でありました。

○先月の末、私達は大発見をいたしましたので御報告申し上げます。

それは長崎経済研究所の安田部長の御紹介で市内外海町の出口ご姉妹が俗にいう「マリア観音」を持参してこられたのです。観音様は真つ暗く焼けた箱の中に紙に包まれ納められていました。早速、拝見させて頂きました。観音様は明末清初中国福建省徳化窯の白磁観音像で、体内には古紙に包まれた八個ばかりの小さなメダイが押し込まれていました。

ご姉妹の話によると祖母様より「人には見せなさんなよ」と言われていたそうです。そして更に続けて「私の祖母は枯松神社あたりの土地を持っていたそうです」と言われた。

枯松神社は先年来「かくれキリシタンゆかりの神社」と言われ、神社の前には「キリシタン墓」と言われてきた墓域があるのです。

私は、是等の事より、此の観音様は明治時代の廃佛毀釈の時、神社より出口家に引きつがれた物ではないかと考えてみたのです。次に私は佛像内のメダイを今一度、拝見させて頂きたいと考えています。

○本協会の木原妙子女史が、長崎の外人洗濯業関係資料として「明治三十七年大浦洗濯営業組合契約証書正本」を持参して下さいました。長崎の外人洗濯業は我が国初期の外国式洗濯の始めであり大いに参考になる資料でありました。

○その翌日より名古屋榎山学園恒例の「長崎の平和と文化を訪ねる研修旅行」の生徒さん来訪。「三十年以上お世話になっていきます」と指導主任の高橋先生は言われた。本会より山口広助理事を中心に六名が指導員として参加して下さいました。

○次いで神戸市立博物館より来年一月十二日までアメリカ・メトロポリタン博物館所蔵の古代エジプト人型内棺・ミイラ等約二〇〇点を借用展示している。来館案内状を戴く。メトロ美術館には約二万点のエジプト・コレクションがあるとの由。

○最後に本年の事務所を終了は十二月二十九日(月)午後三時。翌平成二十七年は一月五日(月)午前十時より開所いたします。

どうか皆様、来る年は幸大き、良き新年を御迎
敬 具

丸山の花月は古きビイドロのコップに盛れる南蛮の酒
シイボルト慶賀ともなひ人垣にまじらひ見るか此の鯨曳
(鯨の沙吹)
諏訪神事屏風
まひる日は光きらきらし踊見る紅毛人の長き煙管に
雲 仙

雲仙の雲にねむりておもふことなほ人間の上をはなれず
雲仙の山のホテルの朝の卓に山草の実のま赤きをめぐ
雲にうまれ霧に華さく雲仙の山のおざみはよき色したり
黄櫨群の秀つ枝いささか朱さしたり雲仙の秋は早く来れり
信綱は長崎の食を味わい、食器を愛で、長崎くんちを楽しんだ。そして「雲仙」という地名に強い魅力を感じたのであった。

次は第九歌集『瀬の音』より、長崎医科大学での講義のために来崎した昭和十三年(六十六歳)の歌

長崎なる浦上天主堂にて
彩色ガラス洩る日光濃しマリア立たす聖堂の前の消えざる聖き灯

古き信者がもたらし麻繩の鞭の、繩よれよれになれるを見て

苦行人この麻繩の鞭とりあげ血ぶくまで我をうちけむか我を
炎なす心の心もちつつなほ我を呵責しうちけむ鞭か

この鞭や神の真鞭うつそみの身も心をもうちくだけとふ

悲しかも苦行足らざる我を我とむちうちうたむ此の鞭とりて

信綱は浦上天主堂の附属館で見た麻繩を、幾首もの歌に詠んだ。この鞭は、禁教時代の信者達が自身の信仰の浅いことを責めて自らを鞭打ったもの。この鞭を手にした信綱は慄然として、自己を省みたのであった。

竹柏会「心の花」は現在、信綱の孫の幸綱が主宰。信綱は昭和三十八年九十一歳で没した。

信綱の弟子である九条武子にも素晴らしい長崎詠があるので、ご紹介の機会があれば幸いと思う。

参考資料

『佐佐木信綱全歌集』佐佐木信綱著、『明治大正昭和の人々』佐佐木信綱著。歌集『踏繪』柳原白蓮著。『長崎歌人伝』こは肥前の長崎か、堀田武弘著。『近代短歌の鑑賞77』小高賢編。『短歌往来』特集佐佐木信綱没後50年。平成25年11月号。『短歌』特別対談村岡花子と短歌。平成26年9月号。

(長崎歴史文化協会理事)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

